

今回の質問と、過去の院内ヒアリングでの関連答弁の一覧

質問項目	関連する過去のヒアリング	そのときの答弁内容
<p>II. 炉計画について</p> <p>高速炉計画について</p>	<p>2016.10.12</p>	<p>固定ネジは炉内に残ったまま回収できていないが、再稼働に支障はない。</p>
<p>III. もんじゅ廃炉の諸問題</p>	<p>2016.10.12</p>	<p>廃炉費用の試算は3650億円。期間は30年程度。 この費用の中にナトリウム抜き取り技術開発費は入っていない。</p>
<p>2. 廃炉中の安全対策について</p> <p>① 地震対策および津波対策の内容を具体的に説明して下さい。</p> <p>② もんじゅ廃炉に関わる新規制基準はできているのですか。</p>	<p>2016.10.12</p>	<p>新規制基準はある。新規制基準そのものは発電炉と同じタイプミンドグ（H25年7月）にでき、発電炉で求められる津波対策と違った新規制基準をあらかじめ盛り込んだ。その上で溶融炉心に対する対策要求等、ナトリウム炉特有の考慮事項も盛り込んである。ただその基準をどう解釈するかなど細かい運用面については決まっていない点もある。</p>
<p>1. 昨年の院内ヒアリングでは、プルサーマル運転によるプルトリウム消費について「2015年という時期は見直す」と答弁されました。どういう見直しをしたのか、時期と量について具体的に数字を示して下さい。</p>	<p>2016.2.17</p>	<p>2010年9月に電事連が公表しました「プルトリウム利用の計画」によると2015年度までに16～18基の原子炉で、MOX燃料として年間5.5～6.5トンのプルトリウムを利用するとなっています。電事連では現時点でこの計画のうち2015年度という時期は見直す事になっていますが、それ以外の16～18基のプルサーマルの目標については現時点でも変わりはないと考えています。これにより、利用目的のないプルトリウムを持たず、適切な管理・利用を行っていくという政府方針を堅持していく所存です。</p>
<p>2. プルサーマル運転で何年でゼロにする計画か、具体的な年数と消費量を示して下さい。</p>		<p>利用目的のないプルトリウムを消費できるといっていきながら政府方針ですので、プルトリウムを消費できるという立場です。・・・現在はプルサーマルがまだ立ち上げ段階です。「余剰ではない」とは言い切れません。今現在、出て来っていないのは事実でございます。</p>

今回の質問と、過去の院内ヒアリングでの関連答弁の一覧

質問項目	関連する過去のヒアリング	そのときの答弁内容
<p>4. 英国がプルトニウムを処理するビジネスと考えるのも良いと言っていることについて検討されましたか。</p> <p>5. 海外にあるプルトニウムの管理・処理費用について調査しましたか。していない場合、なぜしないのか、また今後するつもりはあるのか答えて下さい。</p> <p>7. これまでに常陽及びもんじゅで生成された高純度プルトニウムについて</p> <p>① それぞれの量について、シミュレーション結果を具体的な数字で示して下さい。</p> <p>② 常陽のブランケットから取り出したプルトニウムについて、前回の答弁はもんじゅの燃料に使用したのではとのことでしたが、あやふやでは困ります。常陽から取り出したプルトニウムについて、その量と純度、及び何に使用したのか、正確にお聞かせ下さい。</p>	<p>イギリスで、再処理したプルトニウムをイギリス側で引き取ってもらおうということをイギリスと相談検討したことははない。承知していない。</p> <p>海外のプルトニウムを管理・処理などにかかる費用について、承知していない。調査分析はしたことはない。海外委託のコストについては民間ベースなので、国としては承知していない。</p> <p>現時点ではプルサーマルでプルトニウムを消費していくというやり方で今後再処理工場から発生するプルトニウムもございませうし海外のプルトニウムも消費していくということです。</p> <p>もんじゅのブランケット燃料は入ったまま、取り出されていい状態です。常陽のブランケットから取り出されたプルトニウムについては正確なことが言えませんが、もんじゅの燃料などに利用されたかと思えます。</p>	
<p>5. 再処理よりも乾式貯蔵による保管・処分の方が低コストではなないのでですか。</p>	<p>正確にお答えできるわけではありませんが、2011年の原子力委員会のお試算でも、直接処分の方が安いという数字になっております。そのコスト差はありますが、<u>政策上の様々な観点から</u>直接処分ではなく再処理を選択するという事です。</p> <p>直接処分の方がコスト的に安いですが、ウラン資源の有効利用という点では、一般的には核燃料サイクルによって1~2割を節約できるといふことです。</p>	
<p>2016.2.17の答弁を受け、4月の院内ヒアリングでは、「<u>政策上の様々な観点</u>」とは何か質問。</p>	<p>核燃料サイクルのメリットという部分で説明している。ウラン資源の有効利用、放射性廃棄物の減容化、放射能レベルの提言を意味している。</p>	

再処理の諸問題

再処理の諸問題